

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	学校教育における発達障害支援ネットワークに関する社会学的研究 －横浜市の取組を事例として－
キーワード	①発達障害、②学校教育、③支援ネットワーク

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	クシハラ カツヤ 榎原 克哉	所属等	東京通信大学 情報マネジメント学部 助教
プロフィール	社会学（医療社会学、質的研究）を専門としています。精神科の外来診療の医療機関と患者に関する研究を経て、現在の発達障害に関する研究に着手するようになりました。今後も調査を重点的に進めていくことで、小中学校の教育現場に寄与できる学術的知見の産出を目標としています。		

1. 研究の概要

本研究では、学校教育現場にて発達障害支援に携わる教職員、支援機関や組織、専門家等からなるネットワークについて、社会学の立場から質的調査を行ない、考察を行なった。

研究の特色および独創性として、以下の2点が挙げられる。

(1) 学校教育現場にて、教職員が発達障害の児童生徒に対して、どのような対応（教育法や支援など）をしているのかを、参与観察やフィールドワーク等を通じて、実証的に分析した点。

(2) 発達障害の診断がなされていない、あるいは「障害」というカテゴリーに必ずしも収まらないような、発達上の課題を抱えた児童生徒（いわゆる「グレーゾーン」）に対する対応についても、カバーしていること。

2. 研究の動機、目的

これまで中心的な研究対象としてきた精神医療においては、医療化（ある問題を医療の問題とみなすこと）や社会問題の個人化（ある問題の原因を社会の側ではなく個人の側に求めること）を批判的に検討する研究が数多くなされてきた。しかし、昨今の精神医療の動向を顧みると、医療化に批判的な専門家や、社会環境の調整を通じて問題解決にあたらうとする実践の影響力も強まりつつあり、精神医療の社会学的考察もこれに合わせて刷新する必要性を感じた。

近年では精神保健福祉や教育現場における合理的配慮の対象として、発達障害が注目されており、支援のインフラ整備も進んでいることから、対象として発達障害を選択するにいった。また、これまで行ってきた調査のなかで、発達障害の診断を受けてきた人々の経験を耳にする機会があったことも背景にある。彼らは全員成人だったため、学童期に現代のような発達障害の早期発見や支援を受けてこなかったが、対照的に現代はきめ細やかな支援体制が整いつつある。この約20年の間に生じた「発達」観をめぐる急速な変化が、学校教育現場に及ぼした社会的影響を明らかにしたいと考えたことから、本研究を着想するにいった。

3. 研究の結果

本年度の研究経過として、文献調査のほか、小中学校の発達障害支援の現場や学級および教職員を対象に、参与観察やインタビュー調査、調査票調査を実施した。研究結果は、目下まとめている最中であるが、主な知見として、以下の2点が挙げられる。

(1) 発達障害とされる児童や生徒の特徴が学校ごとに異なりやすく、一定の傾向性やパターンを示すこと。

(2) 発達障害の児童や生徒への支援の糸口となる「発達上の課題」の発見と支援につなげる段階において、これを困難にする複数の構造的要因や、教育現場における発達障害の「医療化」への慎重さがあるために、支援のネットワーク形成に影響を及ぼすこと。

4. 研究者としてのこれからの展望

英国の社会学者、ポール・ウィリスは、『ハマータウンの野郎ども』（1977）という著書の中で、当時の中等学校の様子を民族誌というかたちで活写し、緻密な社会学的分析をすることで、後世の社会学に大きな影響を与えました。現代日本の学校を舞台にウィリスのような民族誌を書く——という大言壮語のような気もしますが、外側からはなかなか見えにくい学校で何が起こっているのか、どのような社会的な変化や問題が生じているのか、そのリアリティに肉薄した研究を今後展開していくことを目標の一つとしています。2019年度の本研究課題を通じて、その入り口となるような調査活動を行なうことができました。また、もう一つの目標として、社会学という立場から、発達障害を抱える児童や生徒、保護者、教職員や支援者の方々に対して貢献できるような学術的知見を産出することがあります。

5. 社会に対するメッセージ

「発達障害」という言葉が人口に膾炙し、障害支援のための法律の施行や制度化、インフラの拡充が進んでいます。一方で、「発達障害」とされる子どもたちが、どのような学校生活を送っているのか、いかなる進路形成をしていくのか、実際にはどのような支援を受けられるのかといった点については、未だ未解明な部分が数多く残されています。

今回配布を受けた奨励金を通じて、文献研究や調査の実施を支障なく行なうことができたこともあり、2020年度科学研究費助成事業の科研費（若手研究）「公立小中学校教育における発達障害支援の実証的研究—「学校文化」の比較」（研究課題番号：20K13712 研究期間：2020年～2023年）に採択されました。今後も学校教育の発達障害に関する研究に継続的に取り組み、発達障害を抱える人々にとって生きやすい社会づくりにつながるよう、研鑽に努める所存です。